

標準化テスト(TOEFL ITP)に見られる九大生の英語能力の変化

徳見, 道夫
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語情報学講座

<https://doi.org/10.15017/7148423>

出版情報：言語科学. 45, pp.79-83, 2010-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



標準化テスト(TOEFL ITP)に見られる

九大生の英語能力の変化⁽¹⁾

九州大学大学院言語文化研究院 徳見道夫

(Gyuto-e 導入の経緯)

九州大学における英語教育は、主として言語文化研究院の英語教員が実施しており、その活動は多岐にわたっている。それは1、2年生を対象にした全学教育の言語文化基礎科目、3、4年生や大学院生および教職員を対象にした言語文化自由選択科目、各学部における英語教育に対するアドバイス、就職支援のための英語教育等があるが、この論文では、言語文化基礎科目の英語 IIB(Gyuto-e 授業)を主に扱うことにする。⁽²⁾

言語文化研究院英語科では、2006 年度から「新カリキュラム」のもとに英語教育を実施しているが、その理念は English for Academic Purposes(学術目的の英語)である。少人数のクラス構成で、徹底した英文エッセイ・ライティングの実力を養成し、将来、研究者としての基礎的英語能力を構築しようとするものである。しかしながら、従来のシステムではマンパワーの関係から、多くの少人数クラスを作ることはできなかった。そのため大人数クラスでも効果的に英語学習が可能なインターネットを利用した英語教育プログラム Gyuto-e(代表者は広島市立大学青木信之教授)の導入を決定した。

Gyuto-e の英語教育効果の測定については、徳見が英語教員の援助を得て 2006 年に実証した。その測定結果を簡単に述べれば、半年間の Gyuto-e の授業で、TOEIC IP の成績が平均で 78 点上昇した。さらに 300 点以上の上昇者 1 名、250 点以上の上昇者 2 名、200 点以上の上昇者 4 名、150 点以上の上昇者 15 名とかなりの有効性が証明された。⁽³⁾

(グラフの説明)

下の表は⁽⁴⁾、2007 年 7 月実施の TOEFL ITP の成績と 2008 年 1 月実施の TOEFL ITP の成績を比較したものをグラフにしたものである。縦軸が人数、横軸が点数をあらわしているが、リスニング、文法、リーディングは 5 点刻み、最後の合計点グラフは 10 点刻みに設定している。最初のリスニングを例にとると、35 とあるのは「35 点以上 40 未満」ということになり、40 は「40 点以上 45 未満」で、45 は「45 点以上 50 未満」をあらわす。文法、リーディング も同様である。合計点 は 10 点刻みであるので、350 は「350 以上 360 未満」、360 は「360 以上 370 未満」という意味である。

2007 年 7 月実施の TOEFL ITP の受験者数は九州大学の 1 年生のほぼ全員であるが(1 学

年約 2700 名)、2008 年 1 月実施の TOEFL ITP の受験者数は 264 名である。そこで今回の調査対象は 264 名となる。264 名は九州大学の 1 学年のほぼ 1 割の数にあたるので、統計処理上、十分に信頼に値する人数であると思われる。

今回調査対象になった学生は、2008 年 1 月の時点で、九州大学に入学して、英語 I、英語 IIA、英語 IIIA、英語 IIB(Gyuto-e)の授業を受講している。それゆえ成績の変化は英語 IIB (Gyuto-e)のみが要因ではないことを断っておかなければならない。因みに、英語 I は共通教科書を用いた大人数授業、英語 IIA および英語 IIIA は英語エッセイ・ライティングを主眼とした少人数クラス授業である。英語 I と英語 IIA は 1 年生前期、英語 IIIA と英語 IIB(Gyuto-e)は 1 年生後期に受講する。なお英語 I に関しては、2010 年度より共通教科書を廃して、言語文化研究院英語科で選定した複数のテキストから教員が選択して使用する形態にする予定である。英語 IIB、IIIB に関しては、現行のシステムでは、1 人の教員が 2 クラス担当しているが、2010 年度より 5 クラス程度担当する予定である。担当教員にあまり負担がかからないように授業形態や試験方法について工夫しているところである。

(グラフの分析)

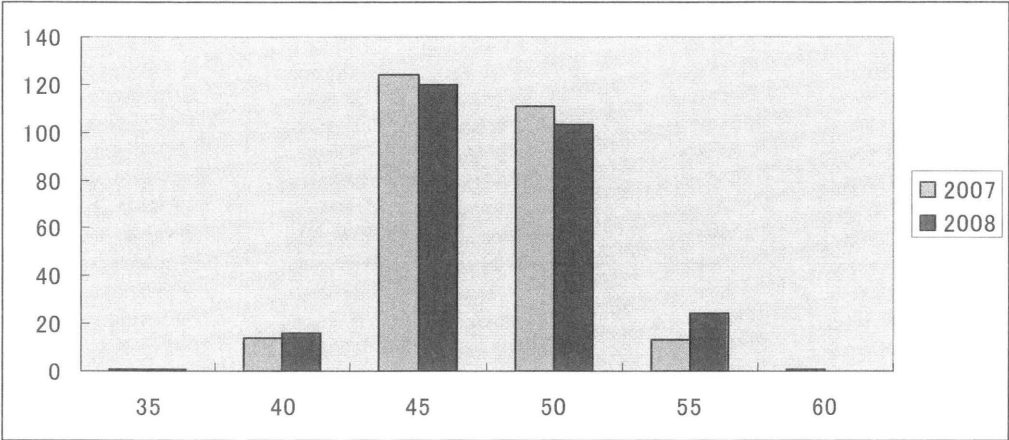
リスニングに関しては、45 点、50 点表示の学生数が減り、55 点表示の数が増加している。リスニングの成績は上昇したと考えてよいと思われる。リスニングは Gyuto-e で相当鍛えられるので、九大生のリスニング能力の上昇は Gyuto-e の成果として考えて差し支えないと思われる。インターネットを利用した Gyuto-e 英語学習プログラムでは、リーディング問題 40 問、リスニング問題 800 問、文法問題 421 問あり、リスニングの能力が付くように工夫されている。英語 I や英語 IIA、IIIA ではリスニング能力上昇の訓練はほとんどしていない。ただし、英語 IIA、IIIA のクラスでは、ネイティブの教員も担当するのでリスニングの成績上昇に若干寄与したとも考えられる。

文法に関しては、顕著な成績上昇が見られる。35、40、45 点代の学生数が減少し、50、55、60 点代の学生が増えているからである。これも英語 IIB の Gyuto-e で膨大な数の文法問題をこなさなければならないので、その成果であると考えられる。しかし、Gyuto-e と TOEFL ITP の問題はかなり異なっているので、その成果の質の分析にはこれからの調査が必要となる。

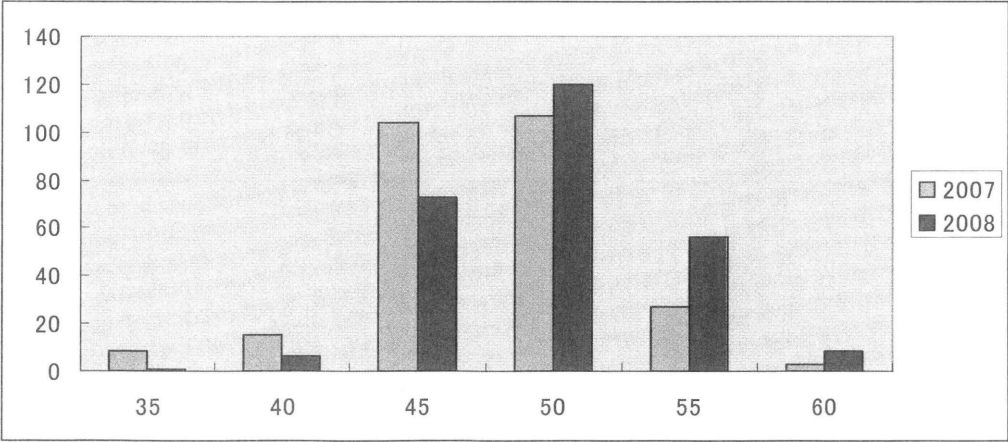
リーディングでは学生の成績が落ちている。これは TOEFL ITP の英文がかなり難しいこととテストの受験中はゆっくり英文を読んでいる時間がないことによるものである。また高等学校における大学入学試験準備では相当難解な英文を読む訓練をするが、大学入学を果たした後は、論理的な英文を読む機会が少ないからとも推察される。Gyuto-e でも読解問題を扱っているが、教師の周到な指導がなければ学生は英文を読解することができないことをこの結果は示唆している。因みに、徳見は Gyuto-e 授業の際に、課題と称して英文の日本語訳を提出させているが、少し難解な英文ではほとんどの学生が解釈を間違える。昨今のテレビ、ラジオ、映画等の普及で、文字に接する時間がかかなり減っているし、大人

でも普段から文章を読んでいる人は数が少なくなっている。大学教育の役割は、文字に学生を拘わらせて真のアカデミーを身につけさせることにあるので、九州大学の英語教育では、少し難解な英文を短時間で理解する訓練を実施する必要があると思われる。なお英文読解能力の養成は、母国語である日本語への気づきも強くさせると期待できる。

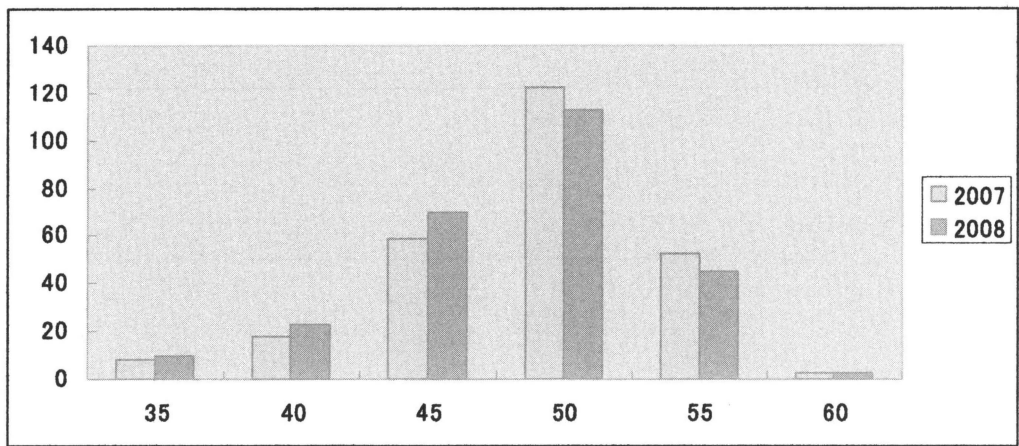
■ リスニング



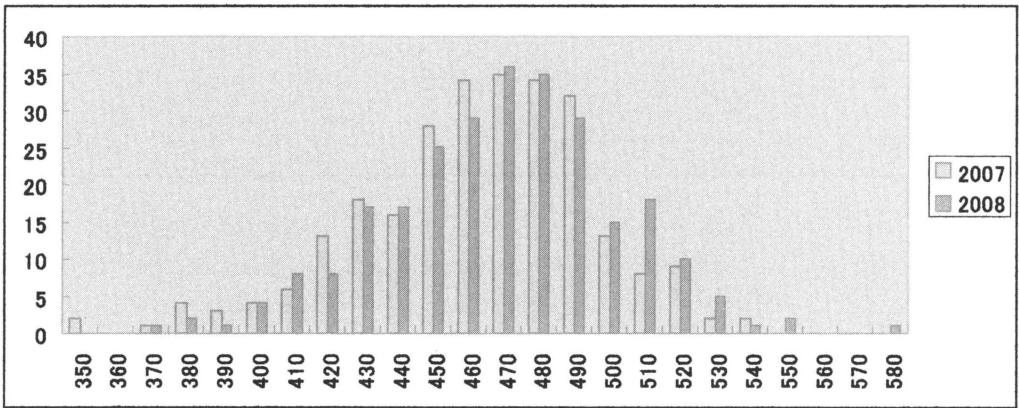
■ グラマー



■ リーディング



■ 合計点



注

- (1) 本論文は 2009 年 3 月 21 日に松山大学で行われた「科学研究費補助金報告会議」で読み上げた論文に加筆訂正したものである。なお、この論文は、広島市立大学青山信之教授との合同研究「多様な大学環境における英語 e ラーニングの効果とラーニング・マネジメントの研究」(基盤研究(B)) (平成 18 年度より 3 年間)の成果として発表するものである。同科学研究費補助金から 3 年間九州大学での TOEFL ITP の試験実施に対して援助してもらった。ここに記して感謝の意を表したいと思う。
- (2) その他に全学の学生や教員が利用できる英語学習プログラム NetAcademy の管理運営等も言文研究院英語教員が担当している。なお、九大学生は英語 IIB と英語 IIIB を履修するが、英語 IIB は 1 年生前期、英語 IIIB は 2 年生前期に履修することになっている。
- (3) 詳しくは、「平成 16 年度・17 年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトー工学部生を対象とした英語カリキュラムの 4 年間システム化およびそのための教材開発報告書」(研究代表者 徳見道夫)を参照のこと。
- (4) 本論文におけるデータ処理は、立命館大学の田中省作准教授と国際教育交換協議会(CIEE) 日本代表部九州オフィス所長である西村明夫氏に大変お世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。ただし、学生の個人情報に関しては相当の配慮を行ったことを明記しておく。